

言語の生物学的進化と文化進化

加地仁保子 (Nioko Kaji)

京都大学

言語進化の議論に見られる大きな対立の一つは、言語が生物学的進化の産物か、それとも（生物学的に進化した能力にもとづく）文化的継承の産物か、という問題である。前者の立場をとる論者のなかでも特に、Pinker や Jackendoff は、言語の能力を、コミュニケーションという機能のために自然選択によって進化した適応と見なす。これに対して、Tomasello らは、言語を、適応そのものではなく、（社会的認知などの）より一般的な生得的認知能力にもとづく模倣学習を通して文化的に進化したものだと考える。

ここに見られる対立は言語進化に関する議論にとどまらない。それは、より広い視野で見ると、人間の文化全般に対して進化的観点からの説明を与えようとする有力な研究プログラムのうちの二つである進化心理学 (evolutionary psychology) と二重継承説 (dual inheritance theory) のあいだの対立として捉え直すことができる。文化の説明において、進化心理学の提案する疫学 (epidemiological) モデルと二重継承説による累積的文化進化モデルは、いくつかの点で対立しているように見える。

まず、疫学モデルによると、文化の形成において、更新世の環境への適応として進化した心理メカニズム（心的モジュール）が決定的な役割を果たしている。これに対して二重継承説は、更新世後期の激しい気候変動を根拠にモジュールによる文化の説明を否定し、そのような不安定な環境では、モジュールではなく、領域一般的な社会的学習（模倣）能力が自然選択によって好まれたと主張する。また、二重継承説は、このような社会的学習メカニズムによって文化が累積的に進化したと考え、生物学的進化とのアナロジーにもとづく文化進化のモデルを作ろうとするが、進化心理学は文化が累積的に進化するとは考えていない。

本発表では、この二つの研究プログラムの理論的、方法論的主張を分析し、その両立可能性を検討する。そして、それが言語進化の議論に対してもつ含意を述べる。